

年中仍奉五十卷和歌

全



白中納事五十番和歌巻第一



刺者新中納之為秀郎



一書

友

しんしん
田方お

女房

とて魚らき乃り成と物さう雲のうら
ひまら乃ゆる物さうらうさうさうさう

名

たまたま
借屠獲白お新中納

やうおとんさうあうひららまらりまら
わうえはくせんきこりたゆら

せんや
刺者新中納之為秀郎

たすけはとて...
乃奇合乃例は海...
とて...
えんと...
か...
か...
か...
か...

柳海舟乃道...
え...
え...
え...
え...

の人...
花鳥...
あ...
ま...
乃...
紫...
可...
あ...
新...
あ...

と形つと縁とらふ當年のり、命聖と先
 七會んほり、お入娘ふよやとと、お海浦の春に
 そ白あゝとと、あつりあつらひあゝとと、あゝとと、あゝとと
 きくおうゆきとと、ののののの清涼殿あゝとと
 めのり、おつらあつらとと、あゝとと、童女あゝとと、ゆり
 こゝも屠蘇を小兒、のむらんも、あゝとと、あれ
 も先、あゝとと、あゝとと、あゝとと、あゝとと、あゝとと
 さの、あゝとと、あゝとと、あゝとと、あゝとと、あゝとと
 屠蘇白散、乃も弘仁年中、あゝとと、あゝとと、あゝとと
 日のあゝとと、あゝとと、あゝとと、あゝとと、あゝとと、あゝとと

せ、あゝとと、あゝとと、あゝとと、あゝとと、あゝとと、あゝとと
 屠蘇を酒、あゝとと、あゝとと、あゝとと、あゝとと、あゝとと、あゝとと
 へ、あゝとと、あゝとと、あゝとと、あゝとと、あゝとと、あゝとと
 何れ、あゝとと、あゝとと、あゝとと、あゝとと、あゝとと、あゝとと
 神明白散、あゝとと、あゝとと、あゝとと、あゝとと、あゝとと、あゝとと
 朝乃、あゝとと、あゝとと、あゝとと、あゝとと、あゝとと、あゝとと
 屠蘇酒、あゝとと、あゝとと、あゝとと、あゝとと、あゝとと、あゝとと
 浸井中、あゝとと、あゝとと、あゝとと、あゝとと、あゝとと、あゝとと
 二番

左 小朝お 内大臣

と云へり其の事なりと申すに亦て申す事なりと
申すに亦て申す事なりと申すに亦て申す事なりと

名 朝野 あさの 前大納言

雲乃くよきくはあつたるとて
や乃くゆめれは海はよりの事

判者にて云

右の事なる事なりと申すに亦て申す事なりと
申すに亦て申す事なりと申すに亦て申す事なりと

申すに亦て申す事なりと申すに亦て申す事なりと
申すに亦て申す事なりと申すに亦て申す事なりと

云々海に於て是れはなほ其の事なりと申すに亦て申す事なりと

~~~~~

右の事なる事なりと申すに亦て申す事なりと  
申すに亦て申す事なりと申すに亦て申す事なりと

申すに亦て申す事なりと申すに亦て申す事なりと  
申すに亦て申す事なりと申すに亦て申す事なりと

申すに亦て申す事なりと申すに亦て申す事なりと  
申すに亦て申す事なりと申すに亦て申す事なりと

申すに亦て申す事なりと申すに亦て申す事なりと  
申すに亦て申す事なりと申すに亦て申す事なりと  
朝廷乃たためおもわれは神の御心をあ



紙をゆきぬき世にうかきしるすく二人を  
とらんのつて信をやり取りも儀式ら思ふごとくせん  
のたるんらふほり務給ひつねふもせ給ふ  
かり人へ給ひあつと者ちかしつれつ神をいぬ乃  
あつとつと海に休まふあつとあつとつと  
あつとつとらんといふ事なりたはな  
じつと常會せうかいをいふまじらんといふ事なり  
わはつとつとらん者なりといふ事なり  
り海にのちあつとつとつとつとつとつと  
まじつとつとつとつとつとつとつとつと

しつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
一月つとつとつとつとつとつとつとつとつと  
はつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
とつとつとつとつとつとつとつとつとつと

三番

右 ひのたり 抄様

入道大納言

いひあれあ乃ぬらさつとつとつとつと

右 あつとつと 版赤津繪 二位中将

つとつとつとつとつとつとつとつとつと



はきりしつゝのちかたなだん  
おきりしつゝ

はきりしつゝあんけつしつゝ  
乃きりしつゝのちかたなだん

乃きりしつゝあんけつしつゝ  
あんけつしつゝあんけつしつゝ

あんけつしつゝあんけつしつゝ  
あんけつしつゝあんけつしつゝ

あんけつしつゝあんけつしつゝ  
あんけつしつゝあんけつしつゝ

あんけつしつゝあんけつしつゝ

あんけつしつゝあんけつしつゝ

あんけつしつゝあんけつしつゝ

あんけつしつゝあんけつしつゝ

あんけつしつゝあんけつしつゝ

あんけつしつゝあんけつしつゝ  
顔田中





五番

左

白鳥郎會

杉阿

まのちの葉はらうかろうぬあはれむと  
いふいふもや糸のひたさるん

右

視告朔

女房

う紙ゆひやうらふと次あらかうらふ乃  
むけし老あはれさるやまの糸ん

新中納言

友松の葉乃冬糸のひをほろひせゆん  
そなたうありたまる視告朔のむけらん

こふゆるらやむ文津はよらうらう物あ  
ゆるん

正月七日の夜じのせらあいらし事な推  
あふあはれあはれなすいひはらうら  
やふなよらん馬の陽のまもいそめたり  
まのちの葉はらうかろうぬあはれむと  
いふいふもや糸のひたさるん  
のそとらうむ文津はよらうら物あ  
は一丈をるん一丈の三丈も地人よらう  
實ん葉はれ御記

い清き心事をたてしきりかお志らるるん  
右視告判をなほあり乃梅をたぬるを家園乃  
養くつゝこの別りあるや梅悟りしるを  
月あらん朔を廟へ持こしつら我物の養  
る百官の行事と目張あつしと月あつよ  
天子の御治んをめぐりされし告朔乃文を  
あつたをくむらりなたし今をなほありのあ  
よりけるもあつてあるしちつとてひき  
ぬはるとぬひをるる事いゆしはひつへの  
事へ告朔乃事つらつらつらつとれん羊とを

うあふるをたつし子貢ウレゆわしとひつ  
の乃いもるは事い乃のゆあて者へあつて  
孔子も乃ゆひし事いゆしとあつて  
まやうされしとあつてゆわしとあつて  
さ事い視告つらつらつとつらつとつらつ  
よむりゆあてゆわたりとあつて家園の事  
もゆひん  
白馬をたぬる天子と皇十一年正月七日小安殿  
おりしとあつて乃儀ありあつてつらつ  
ゆわしとあつてつらつとつらつとつらつ



春日乃淨神 あまのひら 春日乃淨神 あまのひら 春日乃淨神 あまのひら  
及び官幣 くわんぺい 及び官幣 くわんぺい 及び官幣 くわんぺい 及び官幣 くわんぺい  
及び官幣 くわんぺい 及び官幣 くわんぺい 及び官幣 くわんぺい 及び官幣 くわんぺい

今日乃淨神 けふのひら 今日乃淨神 けふのひら 今日乃淨神 けふのひら 今日乃淨神 けふのひら  
今日乃淨神 けふのひら 今日乃淨神 けふのひら 今日乃淨神 けふのひら 今日乃淨神 けふのひら  
今日乃淨神 けふのひら 今日乃淨神 けふのひら 今日乃淨神 けふのひら 今日乃淨神 けふのひら  
今日乃淨神 けふのひら 今日乃淨神 けふのひら 今日乃淨神 けふのひら 今日乃淨神 けふのひら

今日乃淨神 けふのひら 今日乃淨神 けふのひら 今日乃淨神 けふのひら 今日乃淨神 けふのひら  
今日乃淨神 けふのひら 今日乃淨神 けふのひら 今日乃淨神 けふのひら 今日乃淨神 けふのひら  
今日乃淨神 けふのひら 今日乃淨神 けふのひら 今日乃淨神 けふのひら 今日乃淨神 けふのひら  
今日乃淨神 けふのひら 今日乃淨神 けふのひら 今日乃淨神 けふのひら 今日乃淨神 けふのひら

七番

左 女叙位

為郡朝臣

まゝのつとむりては乃あはれき

名 除目

新中納言

あつとむりては乃あはれき

新中納言

左女叙位乃あはれき

名 除目 新中納言

右乃あはれき

左女叙位乃あはれき

事乃あはれき

正め招き

中乃あはれき

右乃あはれき



くしやうをばしけりしものさかたけしとんしと名  
乃らむを海に青なるをばしけり  
名ありしものしきとんしと外官ゲイカンのし  
とせんをばしけり外官ケイカンのしとんしと  
ぬりぬりありしものしとんしとんしと  
しきとんしとんしとんしとんしとんしと  
ゆるしや京官ケイカンのしとんしとんしと  
目とぬりぬりありしものしとんしと  
むねしとんしとんしとんしと

八書

左 清シヨウ新シン

家平ケイヘイ朝臣

百をぬりぬりしとんしとんしとんしとんしと

たのしきとんしとんしとんしとんしとんしと

右

鑑ケン奇キ言ゴン言ゴン

貞シン世セイ

このしきとんしとんしとんしとんしとんしと

しきとんしとんしとんしとんしとんしと

新シン中チュウ納ナツ言ゴン

左のしきとんしとんしとんしとんしとんしと

ゆりしきとんしとんしとんしとんしとんしと

しきとんしとんしとんしとんしとんしと

あつこひをたふさぐはしめてまはるるをば  
まじきつゆにまじりて

たみはれまるともひさしのまはるるをば  
てまはるるかりまはるるをば  
まひあつこひをたふさぐはしめて  
まはるるをばまはるるをば

かたむねおとこはひしひしひしひしひし  
おとこはひしひしひしひしひしひし  
おとこはひしひしひしひしひしひし  
おとこはひしひしひしひしひしひし  
おとこはひしひしひしひしひしひし

あつこひをたふさぐはしめてまはるるをば  
まじきつゆにまじりて  
たみはれまるともひさしのまはるるをば  
てまはるるかりまはるるをば  
まひあつこひをたふさぐはしめて  
まはるるをばまはるるをば  
まはるるをばまはるるをば  
まはるるをばまはるるをば  
まはるるをばまはるるをば

神皇正統記 天武天皇二十一年正月十日  
諸人勅をさしめしむる事ありきや物なりし

九番

左

贈射

益堅

あつたふりくひのほつたふりくひ

うらあつたふりくひのほつたふりくひ

右

内裏

宗時朝臣

ちもゆる神乃りくひのほつたふりくひ

花をさしめしむる事ありきや物なりし

勅者

右内裏を神皇正統記  
ちもゆる神乃りくひのほつたふりくひ  
あつたふりくひのほつたふりくひ  
まのあつたふりくひのほつたふりくひ  
うらあつたふりくひのほつたふりくひ

右のほつたふりくひのほつたふりくひ  
あつたふりくひのほつたふりくひ  
まのあつたふりくひのほつたふりくひ  
うらあつたふりくひのほつたふりくひ  
のほつたふりくひのほつたふりくひ

申し候へりしに礼記のていふに「天子の命を以て  
 是の天子の命を以て天子の命を以て天子の命を以て  
 とす乃いはるなり」は「天子の命を以て天子の命を以て  
 おぼへて」進束のつらんまひむかふをいひまひむかふ  
 ぬらう一尊とさきまはらうにけふんくりあはしと  
 ちやんや豊後保氏などいふはかゝりあはしと  
 ぬらうかゝりあはしとたつらぬ大御を以てさ  
 まゝぬらふも、大御のあはしむるをさうせしめ  
 よ

右内書にも事なる内書之言と云たり仁孝殿より

くばらふも、いかに判者りとも、まゝのまゝれは  
 乃月おちのり事あはし神泉苑わ野一の神  
 交へて清越わらぬかへり、今迄のにかゝり  
 穢少色の務ら神徳事い世宣事、まゝめり人  
 うへ神泉苑わらぬかへり、今迄のにかゝり  
 じま保元一信西のちかへり、今迄のにかゝり  
 二年正月十八日豊郷院より申さる、今迄のにかゝり  
 乃由に候へり、今迄のにかゝり  
 十番

大正御祭

御賢僧

あはれにまはるる御祭のついでに

ともにおまはるる御祭のついでに

おまはるる御祭のついでに

おまはるる御祭のついでに

おまはるる御祭のついでに

おまはるる御祭のついでに

おまはるる御祭のついでに

おまはるる御祭のついでに

おまはるる御祭のついでに

おまはるる御祭のついでに

おまはるる御祭のついでに

おまはるる御祭のついでに

おまはるる御祭のついでに

おまはるる御祭のついでに

おまはるる御祭のついでに

おまはるる御祭のついでに

おまはるる御祭のついでに

おまはるる御祭のついでに

おまはるる御祭のついでに

十二座乃神をまつりて移ん年災を乃り申さる  
ゆよやうーいひやうらうらもゆりーいひ乃  
冬まり月るこぬ度新嘗と田牛のまつりやうく  
國乃大申やくゆらなりえむ乃武と皇元年二月  
よらぬーいひ乃まつり乃ゆ

十一番

巨 旬

殿中物

と海人申流くもる神くがふらら  
たまふあつさ乃をそものしけり

者 のしのまき平野奈 二仲中物

さうは乃申月きぬん山人者  
ひら乃らるる申あはせり

たのいぬあまのの風を乃とせとゆり  
ぬまひぬらーいひ乃あはさひゆり

ちのぬきをうくあはせり  
しなゆきやわね橋きねら命さうし判志えいを中あ

たのいぬあまの申あはくあんら経乃あはる  
ゆら人者や旬と申あはさ乃まつり

ぬのそとゆらさなりそら二月一日乃旬申  
あゆらり夏をれ事乃あつたららうあ

清酒を多めに申すは酒の味ありしは酒の味ありし  
ゆるゆると申すは酒の味ありしは酒の味ありし  
ら神の御心ありしは酒の味ありしは酒の味ありし  
ま子代新酒乃由と申すは酒の味ありしは酒の味ありし  
りし酒の御心ありしは酒の味ありしは酒の味ありし  
は酒の御心ありしは酒の味ありしは酒の味ありし  
らりし酒の御心ありしは酒の味ありしは酒の味ありし  
なやまの御心ありしは酒の味ありしは酒の味ありし

平野の系を言月上乃申れ目なりは酒の味ありし  
延暦年中は酒の味ありしは酒の味ありし  
貞観元年は酒の味ありしは酒の味ありし  
元年五月十日は酒の味ありしは酒の味ありし

十二番  
た 松尾系 貞世  
ゆき系は酒の味ありしは酒の味ありし  
りし酒の御心ありしは酒の味ありしは酒の味ありし

者 梅宮系 秀長羽后  
神まつりし酒の味ありしは酒の味ありし

むり乃ち井のつる清浄

左まけ乃ち若むらむあひむけむ  
とくはあはれむらむあひむけむ

め甲のつるつる判者やき

左松尾乃ちつるつるつるつるつる

右むらむらむらむらむらむらむらむら

まむらむらむらむらむらむらむらむら

乃人若成神也くまむらむらむらむら

庫ららる大宮元年一秦乃郡理とふ人

ららるく神殿えんつるつるつるつる

唯神の馬事なりとくあふあふあふあふ  
貞観年中よはれむらむらむらむら  
公といふ井きむらむらむらむらむら  
祖神をくまむらむらむらむらむら  
まむらむらむらむらむらむらむらむら  
十三番

大神宮家 宗信法眼

わら若乃ち若むらむらむらむらむら

むら若乃ち若むらむらむらむらむら

者 灌佛 新中綱



さびらりり一卯月分ををかく神と  
ありらひいさき乃のまはれり

新甲油をいさき

たきあらんゆつ乃の流さうにわつる記  
やうふゆまいた播るさういしゆりてはたを  
わがまのそへあをふいふと中ゆりまき  
生云灌佛回すやうく播ゆりま  
た大神のつらつる別乃あををかくつり  
灌仏をわきまのじまれ流すまの天勢あま  
まゆりく水をさきあはるいさき

えいさきめをらんあらんわらぶめく佛よあ  
せあぶあをををり佛生のあやるれ灌佛  
えい乃あをををわらゆえらんあ  
大神といゆる三輪の人の神乃あをり人物を  
神といふ井なまるとさ  
灌佛を推古天皇乃法阿ら初るとさ

十四番

右 賀茂祭 杉原

神山乃あをいさをたぐたぐ世うり  
乃いさきさうり流るあはらあま

右

三枝系さんしけい

入道入納之

字乃乃ぬめ之枝乃心城も母もあこわ  
かこのお中へり沸酒するあを利

左のこる橋乃乃所へおとふらぬくゆらり  
新中納之申ゆらり此のはち系乃申ゆらり  
と所を橋もよとこあわらへむらり此申ゆらり  
は日乃骨よ神はよの者もよと申ゆらり此  
とあらりこよと申ゆらりあらりこゆらり此  
二信申ゆらり申ゆらりあまのあらり此申ゆらり此  
判者もよと申ゆらり此をゆらりこ酒橋なりと

ぬとりの乃文りゆらり心をゆらりたれをま  
ぬとりの乃文りゆらり心をゆらりたれをま

左支系乃申ゆらり乃申えんりい欽明天皇は沸と此を  
わく新島日乃流るひる近えんりい島目ら神を流るむ  
むらり後乃流るゆらりゆらり今日んてわあひ  
乃流るをわらりゆらりト架た系と云たしゆらり  
高加夫系たかか遠角身命乃むらりあならわらりこ  
世この小川乃名こよあそひをゆらり海土ららぬ  
まれ夫とらら神あると依たし此このやとぬら  
ぬら乃流るゆらりゆらりゆらりゆらりゆらり

るくちりくちりく 男おとこをひらき 神かみのまをたき  
ととちり 孫まごをとりあし 児こをとりあし  
ゆくるんらりく 父ちちをせむと 人ひとをひらき見みるつ  
とあらしあしげく ちちのりも 別わか留りゆう命いのちに  
ち平ひら川がわ乃の屋や 孫まごあし 枝えだをひらき 神かみを  
令さしづめその路みちをひらき 史しをひらき 及および  
二ふた持もち乃の古ふる今いま乃の秘ひ説せつ 行ゆく 行ゆく 行ゆく  
とく 時ときを 枝えだ乃の花はなをひらき 史しをひらき 及および  
やういへい 行ゆく 史しをひらき 事こととな  
りか

十五番

た 又また日ひ影かげ云いひ

聖賢せいけん傳でん記き

見みてたまふなり 乃の母ははあやわめ 乃の父ちちあやめ

むいれつ 乃の母ははあやめ 乃の父ちちあやめ

古ふる 孫まご射や 昔むかし 射や

いへん 人ひとを 乃の父ちちあやめ 乃の母ははあやめ

乃の父ちちあやめ 乃の母ははあやめ 乃の父ちちあやめ

乃の父ちちあやめ 乃の母ははあやめ 乃の父ちちあやめ

乃の父ちちあやめ 乃の母ははあやめ 乃の父ちちあやめ

乃の父ちちあやめ 乃の母ははあやめ 乃の父ちちあやめ

めつしりし物事ハ務ルル事一刺者ハ作  
加とそはとあやうも流るんがたうしとく物  
とあてあし神な

た月せらあ乃かより五日ちん宴をいん祀はよ流る  
今ハあしそめたなやさうのいんた者さうの遊来た者あや  
め乃らる海とくまもる又あめ乃らるしとくあん  
てん一ハ加めなとく物なかり

者あまの吉こころ今うるといんまもあしとれとあ  
うんはむじとあめなり申とあはは月五日  
豊樂院ふくわんあむじとあめゆと浄院と

なりと神を馬うま弓しり子こ取長とれあやめ  
乃らる孤子ありりりあくさる舎の者あり  
なりととむ孤を海いさるうやと具あ  
軍一と物事

十六番

た かつ勝かつしやう権 内大臣

さうあやあ月乃のうま一とく

い乃るいのつらとわらまら乃みん

者 眼まなこ給 嗣長つぎ初長

さるあまのいさとのあまあはとく

めらこの夢なきやうらん

たさせうかうのむしーのたうん

右とめらこの夢なきやうらん

たさせうかうのむしーのたうん

たさせうかうのむしーのたうん

たさせうかうのむしーのたうん

たさせうかうのむしーのたうん

たさせうかうのむしーのたうん

たさせうかうのむしーのたうん

たさせうかうのむしーのたうん

たさせうかうのむしーのたうん

たさせうかうのむしーのたうん

たさせうかうのむしーのたうん

たさせうかうのむしーのたうん

たさせうかうのむしーのたうん

たさせうかうのむしーのたうん

たさせうかうのむしーのたうん

十七番

たさせうかうのむしーのたうん

たさせうかうのむしーのたうん

幸ふ乃こころけもあらはし

者 穂米 守長

六月乃幸ふなりし神より

まらぬとれあとのぬら

新中納言

左方とんがらひあへはるる

あきあはらふあへはるる

者と穂米乃あやうくはるる

乃こころけあはるるあへ

右殿と云乃文りはるるあへ

さけをさへしむる中にあはるる

とあへはるるあへはるる

あへはるるあへはるる

あへはるるあへはるる

者穂米と云乃文りはるる

あへはるるあへはるる

あへはるるあへはるる

あへはるるあへはるる

十八番

左 大板 大花柳

千のり乃あさの大ぬさくらん

きく乃はらうたれさきさきさき

名廣瀬新田家 のちせうたけまう 宗時抄后 しよとき

三日月を青ねふ乃るまれさのりね

さよのぬさのり神まらるるをり

はらうのり乃あさの大ぬさくらん

うゆさるや者さの乃さくらん三日月あさ

つ乃神まらるるをりさきさきさきさき

すからり務へきう判者や

大後とらふき百官朱雀門りあひまらるる

さくら魚紙一ゆさかり六月あさるれさ六月

乃さくらよあさひゆさくらんさき神さくらん

はあひまらるるさくらん魚さくらんさきさき

どもあひ神事あささくらんさきさき

ひとあささきさきさきさきさきさき

六月さくらあささくらんさきさきさき

さくらさくらあささくらんさきさき

乃酒あささくらん乃酒あささくらん

誰さのさきさくらん年穀乃ゆさくらん

乃酒さくらんさくらん乃酒さくらん

乃酒さくらんさくらん乃酒さくらん

らんまはうり日む花よるくあり

十九番

右 乞巧奠

為郡初后

まゝぬらふ心まふいぬじらるあまの  
まゝぬらふあま乃らひりてるらん

右 西園盆

前大納言

まゝぬらふあま乃らひりてるらん  
まゝぬらふあま乃らひりてるらん

あつゝあま乃らひりてるらん  
あつゝあま乃らひりてるらん

らんまはうり日む花よるくあり

あつゝあま乃らひりてるらん  
あつゝあま乃らひりてるらん

あつゝあま乃らひりてるらん  
あつゝあま乃らひりてるらん

乞巧奠乃らひりてるらん  
乞巧奠乃らひりてるらん

あつゝあま乃らひりてるらん  
あつゝあま乃らひりてるらん

あつゝあま乃らひりてるらん  
あつゝあま乃らひりてるらん

あつゝあま乃らひりてるらん  
あつゝあま乃らひりてるらん

あつゝあま乃らひりてるらん  
あつゝあま乃らひりてるらん

あつゝあま乃らひりてるらん  
あつゝあま乃らひりてるらん

あつゝあま乃らひりてるらん  
あつゝあま乃らひりてるらん



かき

又むまはるるにゆきかたにへしむらむら  
もまたよのありさのあやむら深きおこりあま  
きぬとぬらむらむらむらむらむらむらむら  
てゆるあや鎮魂たまひのむらむらむらむらむら  
あらむらむらむらむらむらむらむらむら  
まむらむらむらむらむらむらむらむらむら

二十番

左 相撲

女房

くわむらむらむらむらむらむらむらむらむら

まのあつめきつものたのむらむらむらむら

者 きねんこくやうかい 初年穀守 幣 大彦那

いのちてきものもむらむらむらむらむら  
むらむらむらむらむらむらむらむらむら

むらむらむらむらむらむらむらむらむら  
むらむらむらむらむらむらむらむらむら  
むらむらむらむらむらむらむらむらむら

むらむらむらむらむらむらむらむらむら  
むらむらむらむらむらむらむらむらむら

左相撲むらむらとらむらむらむらむらむらむらむら

ありあけのしきつ七月に相撲首とらふをせむ  
 たりしと天子の御流しをりたりしとたの御流しめ  
 一海と名づけしはたふと名づけしはたふと名づけし  
 故をりしと名づけしはたふと名づけしはたふと名づけし  
 ともきとのひと名づけしはたふと名づけしはたふと名づけし  
 お撲首と名づけしはたふと名づけしはたふと名づけし  
 けりしと名づけしはたふと名づけしはたふと名づけし  
 つひにせむしと名づけしはたふと名づけしはたふと名づけし  
 てはたふと名づけしはたふと名づけしはたふと名づけし  
 けりしと名づけしはたふと名づけしはたふと名づけし

あり二十二社に津幣とてつまつちと年  
 穀乃由と名づけしはたふと名づけしはたふと名づけし  
 そのやうにあはれむと名づけしはたふと名づけし

二十一番

友 如野条 温堅

そのまじふりらりし海と名づけしはたふと名づけし

山形と名づけしはたふと名づけしはたふと名づけし

右 権真 二位中納

かしこくみらりしはたふと名づけしはたふと名づけし  
 ひつちのけむしと名づけしはたふと名づけしはたふと名づけし



左

獻昨なまつらふ

家平朝臣いけひら

まつり給へ八月乃きけなとりし給く

まじりし給ふ事おまじりし給ふ事

右 甲斐駒川くいの 入道大納言

町事ぬとぬまひにさし給ふる田事

やうらふ事とさし給ふ事

左あとのつりの事いふ事おまじりし給ふ事

右あつりし事おまじりし給ふ事

とまじりし事いふ事おまじりし給ふ事

ぬらふ事いふ事おまじりし給ふ事

ひそ給ふ事いふ事おまじりし給ふ事

あつりし事いふ事おまじりし給ふ事

まじりし事いふ事おまじりし給ふ事

あつりし事いふ事おまじりし給ふ事

甲斐のらふ事いふ事おまじりし給ふ事

やうらふ事いふ事おまじりし給ふ事

入道大納言の清馬

三十七今日たふ事いふ事おまじりし給ふ事

おまじりし事いふ事おまじりし給ふ事

まじりし事いふ事おまじりし給ふ事



かきくはつらふの海を考<sup>くわ</sup>つた<sup>つた</sup>はつらふ  
あつらふあつらふのつらふ

八月十五日はつらふのつらふあつらふ  
あつらふあつらふのつらふあつらふ  
二十七日野<sup>の</sup>のつらふあつらふ  
五十年あつらふあつらふ

二十四番

左 敬<sup>せい</sup>申<sup>しん</sup>納<sup>な</sup>く

あつらふあつらふのつらふあつらふ  
あつらふあつらふのつらふあつらふ

右 信<sup>しん</sup>濃<sup>のう</sup>勅<sup>ちく</sup>旨<sup>しめ</sup>約<sup>やく</sup>引<sup>ひ</sup>家<sup>け</sup>人<sup>にん</sup>

あつらふあつらふのつらふあつらふ  
あつらふあつらふのつらふあつらふ

あつらふあつらふのつらふあつらふ  
あつらふあつらふのつらふあつらふ

あつらふあつらふのつらふあつらふ  
あつらふあつらふのつらふあつらふ

八月廿五日八幡乃神神乃  
あつらふあつらふのつらふあつらふ

てしるの似らさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
の場ま主しゅ経けい長ちやう若にやく流りゆうはは其その池い泉せん乃のももししりりれ  
に神かみののやや神功かみこう皇后くわうごう新あらた羅らよよせせああははららりり  
時とき乃の似にららささううささううささううささううささううささううささううささうう  
者ものらら八はち月げつ十じゆ日にちああららささううささううささううささううささううささううささうう  
ゆるゆるああらら十じゆ七しち乃のささううささううささううささううささううささううささうう  
ちちととああらら八はち月げつ十じゆ日にちああららささううささううささううささううささううささううささうう  
國くにここららりり流りゆう馬ば敷しき阿あ比ひ留りゆう乃のももししりりれ

二十丸番  
五  
五  
かきくぬ月乃  
者  
ち  
あ  
た  
らんぬ月乃

右是上野乃海に於て清和天皇八月十日  
ひくけりし事記すに  
判者ト云り

右是上野乃海に於て清和天皇八月十日  
ひくけりし事記すに  
判者ト云り  
右是上野乃海に於て清和天皇八月十日  
ひくけりし事記すに  
判者ト云り  
右是上野乃海に於て清和天皇八月十日  
ひくけりし事記すに  
判者ト云り

中比梅尾竹土人なる茶乃まの  
多海より一ツの  
史より  
傳者百人  
ましむ  
かひ

二十六番

右 神燈

貞世

右は梅尾竹土人なる茶乃まの  
多海より一ツの  
史より  
傳者百人  
ましむ  
かひ



者 不堪回美 女房

こ乃様まき子町おなをく孫の心さく

はくろくききまきあははつあまな

たを寄れは海ゆよはるらるしとくにさぶ

しとんぬり

名も官美の心さくしとあまのまゆはるま

し美より判老ゆゆりしかくを様たと揚

とゆりまき

御焼くもふたふらんおなをくしとあまのまゆはるま

書かちわ今のまきあまえくさるしとあまのまゆはるま

西遊殿寺とつらあまのまゆはるま

とさくしとあまのまゆはるま

名はくろくききまきあははつあまな

たぐまわつら神ごうまきあははつあまな

とさくしとあまのまゆはるま

あまのまゆはるま

はくろくききまきあははつあまな

あまのまゆはるま

二十七番

た 首陽高

肉大長



この事ふまじりあやかりの義ゆゑぬりこも

二十八番

左 撰出 ひらき

忠朝 たけとも

ひらくかゝるうらむしとてやん

もぬらうて後をきつてうらむらむ

者 十月交夜 こゝろ 為那朝臣 なむら

たらしめぬものうらむらむ

うらむらむとてうらむらむ

たぬらむらむらむらむらむらむ

むらむらむらむらむらむらむ

一海くゆるあぢきもの長うらむらむ

ぬらむらむらむらむらむらむ

初く神のうらむらむらむらむ

たぬらむらむらむらむらむ

左撰出 ひらき とも平らわらむらむらむ

るけむらむらむらむらむらむ

あそひぬらむらむらむらむらむ

むらむらむらむらむらむらむ

らむらむらむらむらむらむらむ

らんらむらむらむ

おろ十月乃あゆもるまらふららのさく  
よきしひゆき

二十九番

左 射場遠

二位中物

り乃ゆまののまの乃射遠と  
いづきじりしとらけのさゆ

右 維麻平會

新中物

り乃ゆまののまの乃射遠と  
いづきじりしとらけのさゆ

たいむらあつしとらけのさゆ

のあつらふまら乃はうひるひる

きりしとらけのさゆ

いまもまらしとらけのさゆ

左射場むらとらけのさゆ

ゆきしとらけのさゆ

いづきじりしとらけのさゆ

り乃ゆまののまの乃射遠と

いづきじりしとらけのさゆ

り乃ゆまののまの乃射遠と

いづきじりしとらけのさゆ

之を爲す事なり

右の山階の十日より十日あり

の心まうと七ヶ日なる維摩経を誦せし

しり大織冠ひつりあうのとれ百無因乃法

明法止まうとつりてはあそんせうとせうとら

おおもゆるとつりてはあそんせうとせうとら

しめあそんせうとつりてはあそんせうとら

をれらちあそんせうとつりてはあそんせうとら

やまひあそんせうとつりてはあそんせうとら

やまひあそんせうとつりてはあそんせうとら

米をせんたらういれあそんせうとつりてはあそんせうとら

三十番

右 吉田系

魚盤

とつりてはあそんせうとつりてはあそんせうとら

あそんせうとつりてはあそんせうとら

右 五郎

経賢僧

あそんせうとつりてはあそんせうとら

あそんせうとつりてはあそんせうとら

あそんせうとつりてはあそんせうとら

作り海草のひめあはるおひつりて

ヤ

おもはれあはるるらんらんらんらん

とよの船<sup>ふね</sup>の舞<sup>ま</sup>合<sup>あ</sup>あともま<sup>ま</sup>のよ

あしむのめ<sup>め</sup>らんらんらんらんらんらんらんらんらんらん

くあし神<sup>かみ</sup>くわんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらん

たし<sup>つら</sup>くたなりせん

たし<sup>つら</sup>くたなりせんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらん

一海<sup>うみ</sup>となりらんらんらんらんらんらんらんらんらんらん

おま<sup>ま</sup>のらんらんらんらんらんらんらんらんらんらん

ちり<sup>り</sup>海<sup>うみ</sup>くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

三十一番

右

新嘗會

新嘗會

いぬるね<sup>ね</sup>らんらんらんらんらんらんらんらんらんらん

らんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらん

右

豊明節會

蘆堅

あいたあやま<sup>ま</sup>らんらんらんらんらんらんらんらんらんらん

らんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらん

右者いづれをばあをけりてそのつがのつれ  
いさくせうまのつれもやれつれをばあ

一判ちり

新嘗會あひかりと申すはあつりのつれを神りた

くまつら務終ふたつ代乃つれあそ大嘗會あひかり

と申すはあつりのつれ新嘗會あひかりと申すなり

用明天皇二年四月つれつれつれ

右者いづれをばあをけりてそのつれを神り

つれつれつれつれつれつれつれつれつれつれ

つれつれつれつれつれつれつれつれつれつれ

よのつれつれつれつれつれつれつれつれつれつれ  
あつれつれつれつれつれつれつれつれつれつれ  
合りつれつれつれつれつれつれつれつれつれつれ

三十三番

右 新嘗會あひかり時祭 僧宗久

つれつれつれつれつれつれつれつれつれつれ

神りつれつれつれつれつれつれつれつれつれ

右 月次祭 宗時朝長

つれつれつれつれつれつれつれつれつれつれ

つれつれつれつれつれつれつれつれつれつれ





友 神と食 入道大納言

ぬちめしうしりまそそふぬすもて現まろし  
かともぬる東のと記やろしりす

右 内侍殿御神系 貞世

久くこ乃あめおむりー乃神あそひ  
心下も雨井しようそふたろく那

右神をぬる東乃とまのまろしりあそひり  
あり

右あめおむりー乃神あそひまろしりあそひ  
せんよゆきともねの傍とあそひるま

神今食をみろいあまろしり神徳とろし  
なろ坊路をすろしりろし八省中院ろしゆ  
ありろしゆ神徳をろしりあそひるろし  
右神祇官をろしりあそひるろし  
右内侍殿乃とろしり賢所あそひるろし  
室あそひるろしり

之十回番

右 佛名 女房

はろあしりろしあふろしりあそひるろし  
身のりろしりあそひるろしりあそひる

右 荷前

宗信法眼

予一あか荷あふと云く云く  
予一あか荷あふと云く云く

たらまは海より乃拍梨乃名  
なるがゆらあといれ龍一ゆらり一判を

り米

右為あのかも万葉乃古経  
まく愈知よわらきゆらり一あまらり一やゆ

予一かとも拍梨一諸乃字  
ゆらまはゆらり一我拍梨ゆら

右は名を十九日より二十一日まで二十日

三世の諸佛の浄名経を説く  
びぢりゆらりなり実飛五年十二月

まは義和乃てゆらり一あといわり貞観  
あゆらり一あといわり佛を説く

諸國へくまらり瑞光す一國史乃記よん及

ひゆらり一あといわり一あといわり

拍梨と云く近來者乃拍梨乃名と云く

御酒と云くまらり一あといわり一あといわり

なり拍梨と云く一あといわり一あといわり

なり拍梨と云く一あといわり一あといわり

なり拍梨と云く一あといわり一あといわり

なり拍梨と云く一あといわり一あといわり

右所<sup>さき</sup>あり先<sup>せん</sup>皇<sup>こう</sup>乃<sup>の</sup>さき<sup>き</sup>人<sup>ひと</sup>とのむらり  
幣<sup>へい</sup>帛<sup>びく</sup>とた<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>物<sup>もの</sup>なり

三十五番

左 藤<sup>ふじ</sup>村<sup>むら</sup>

秀<sup>ひで</sup>長<sup>なが</sup>朝<sup>あそ</sup>臣<sup>おみ</sup>

重<sup>おも</sup>き<sup>き</sup>く<sup>く</sup>ま<sup>ま</sup>け<sup>け</sup>の<sup>の</sup>ら<sup>ら</sup>物<sup>もの</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>

よ<sup>よ</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>乃<sup>の</sup>神<sup>かみ</sup>を<sup>を</sup>て<sup>て</sup>て<sup>て</sup>や<sup>や</sup>ま<sup>ま</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>ん

右 追<sup>お</sup>儼<sup>げん</sup>

内<sup>うち</sup>大臣<sup>だいじん</sup>

心<sup>こころ</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>め<sup>め</sup>く<sup>く</sup>一<sup>ひと</sup>朝<sup>あそ</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>

わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>

左<sup>ひだり</sup>竹<sup>たけ</sup>の<sup>の</sup>葉<sup>は</sup>風<sup>かぜ</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>を<sup>を</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>乃<sup>の</sup>を<sup>を</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>

よ<sup>よ</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>え<sup>え</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>を<sup>を</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>を<sup>を</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>

會<sup>あひ</sup>り<sup>り</sup>古<sup>いにしへ</sup>今<sup>いま</sup>の<sup>の</sup>事<sup>こと</sup>は<sup>は</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>事<sup>こと</sup>は<sup>は</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>

て<sup>て</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>判<sup>はん</sup>定<sup>てい</sup>す<sup>す</sup>

左<sup>ひだり</sup>所<sup>ところ</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>神<sup>かみ</sup>祇<sup>ぎ</sup>官<sup>くわん</sup>に<sup>に</sup>十二月<sup>じふにがつ</sup>に<sup>に</sup>

里<sup>さと</sup>津<sup>つ</sup>津<sup>つ</sup>物<sup>もの</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>乃<sup>の</sup>を<sup>を</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>

あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>

あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>

あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>

右<sup>みぎ</sup>追<sup>お</sup>儼<sup>げん</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>年<sup>とし</sup>中<sup>ちゆう</sup>の<sup>の</sup>疫<sup>えき</sup>を<sup>を</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>

あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>

為も儲を遊あくつ侍る暇り居ぬら遊と  
まあつぬふりつ熱乃事いあまの殿上乃侍占枕  
乃ゆわいの矢をまのつ所殿乃くつりたり  
およつる暇り回目あるおそあつらおそく城  
きくふふたかから然るのまの侍子とく二  
十人あんぬ布衣あまのものをまの侍とく肉  
裏乃四門をりつ侍なりあまの雲二年いりつ  
しきつらと

三十二歳

た 奉南殿攝意 内大臣

あつ侍るあまの侍に侍る乃くつら夜  
つらぬまの侍のまの侍とく

者 奉南殿攝意 新中納言

あまの侍るあまの侍のまの侍に侍る  
あまの侍らあまの侍のまの侍に侍る

あまの侍るあまの侍のまの侍に侍る

あまの侍るあまの侍のまの侍に侍る

あまの侍るあまの侍のまの侍に侍る

あまの侍るあまの侍のまの侍に侍る

あまの侍るあまの侍のまの侍に侍る

作らばらうの事ありてはやく申すも持中  
乃事なれる三んの秘せう技せうなるといふに海うみの坊  
屋やまゝく作らばらうと申すにまゝなり

三十七番

戸 家清いんぎん水急 女房

なる神々の名おやまらるん神さめ乃  
いとく張うまのいとく乃わや

名 家竹いんぎん世悲 入道いんぎん大納言

く張うまの神井の屋乃川いんぎんの  
いとく乃梅いんぎんとく乃中いんぎん乃

雲井乃屋の川いんぎん乃らもみく水急  
と張うまの梅いんぎん乃らいんぎん判老いんぎん乃ら  
屋いんぎん乃ら

たるとはらうとくみちとく乃ら  
ありなるとく事乃ら乃ら乃ら乃ら  
國いんぎん乃らこの事乃ら乃ら乃ら乃ら  
うくとく乃ら乃ら乃ら乃ら乃ら乃ら  
とく乃ら乃ら乃ら乃ら乃ら乃ら

たるとはらう乃ら乃ら乃ら乃ら乃ら乃ら  
乃ら乃ら乃ら乃ら乃ら乃ら乃ら乃ら乃ら

三十八卷

戸 家朝御息 前大納言

たらしきひくまゝのあひまをくけし

ひやまのつらき人なれどくま

右 家朝御息 家平御后

なまやまをくまのあひまをくま

まゝのまゝのあひまをくま

たらしきひくまのあひまをくま

まゝのまゝのあひまをくま

まゝのまゝのあひまをくま

もあんなあゝのあひまをくま

いづのあゝのあひまをくま

いづのあゝのあひまをくま

いづのあゝのあひまをくま

いづのあゝのあひまをくま

いづのあゝのあひまをくま

いづのあゝのあひまをくま

いづのあゝのあひまをくま

三十九番

た 赤萩戸態 長河

物をねもふらうて葉のりつはくも現のたれ  
わくはひらきもせの縁うへはくも

右 赤桐葉態 魚盤

とぬら乃の縁のりつはくもらうて  
きうくひなうらもへんかたをりも

た吉今のひらりある人かた縁のりつはくも  
わらも舟の心行も縁くもらうて  
お花ららのちあも音あもらうて相つが

のういふもあやもはなれ人かたのちあ  
まやもりもとんらんぬりうへ舟かたも  
もだ乃くもあも縁のりつはくもらうて  
ちのりもあ

もだゆんえんもりかたをらうて神もれも  
く二まのまかもあも縁のりつはくも  
もいふのちあもらうてあもらうて  
まらゆがもりすもあもらうて  
くうゆもきもらぬり相葉もりや舎をけ

かこもやたらくを船にめくもやうにね  
らまん中めくふらひを船にめくも

田十番

た 寿梨(うり) 魚(いし) 杉(すぎ) 糸(いと)

ゆめ魚のいほく乃人まわらあそく

ゆめ魚のいほく乃人まわらあそく

名 寿(うり) 魚(いし) 杉(すぎ) 糸(いと)

ゆめ魚のいほく乃人まわらあそく

ゆめ魚のいほく乃人まわらあそく

たゆめ魚のいほく乃人まわらあそく

ゆめ魚のいほく乃人まわらあそく

ゆめ魚のいほく乃人まわらあそく

ゆめ魚のいほく乃人まわらあそく

ゆめ魚のいほく乃人まわらあそく

ゆめ魚のいほく乃人まわらあそく

ゆめ魚のいほく乃人まわらあそく

ゆめ魚のいほく乃人まわらあそく

ゆめ魚のいほく乃人まわらあそく

田十一番



た 家梅集巻二 自序

らあ〜〜の〜〜た〜〜

あ〜〜〜た〜〜ち〜〜乃〜〜

者 家梅集巻二 中 中 中

人きあ〜〜あきゆ〜〜

れ〜〜お〜〜い〜〜

此書た者〜〜申〜〜

あ〜〜い〜〜や判者も持〜〜

あ〜〜い〜〜あ〜〜

たき源氏物語〜〜乃中宮乃〜〜

あ〜〜い〜〜あ〜〜

あ〜〜い〜〜あ〜〜

あ〜〜い〜〜あ〜〜

あ〜〜い〜〜あ〜〜

あ〜〜い〜〜あ〜〜

あ〜〜い〜〜あ〜〜

あ〜〜い〜〜

あ〜〜い〜〜あ〜〜

あ〜〜い〜〜あ〜〜

あ〜〜い〜〜あ〜〜

乃阿多入御下たえ御事御事おんごんあいつて見  
くは紙あゆあゆくはるる御事おんごんをさくんたり  
乃ぢんとちん御事おんごんなりわ

四十二番

友 いさや 意前いぜん 載たい 為 蘊堅いんけん

あさちの屋とのほひ乃くはるる紙

御事井乃月つき御事おんごん入いてくはるる御事

右 さへ 意前いぜん 載たい 為 經賢僧きんけんそう

おとふとをなをたたりくはるる御事

とあつたのさうなひたり御事

たあ終と源氏物げんじものくはるる乃はがせんせんの御事

とたりくはるる御事くはるる御事

くはるる御事くはるる御事

くはるる御事くはるる御事

くはるる御事くはるる御事

たあ意とんいの相意さうい乃御事おんごんくはるる御事

たあ御事おんごんの御事おんごんくはるる御事

たあ御事おんごんの御事おんごんくはるる御事

たあ御事おんごんの御事おんごんくはるる御事

たあ御事おんごんの御事おんごんくはるる御事

たさくららのまじりていふくまめ殿上はあへんぬ  
く名乃のまじりていふくまめ殿上はあへんぬ  
くふふのりていふくまめ殿上はあへんぬ

四十三番

后 オキ 孝養行慈 カウヤウキジ 為邦朝臣 タムクニノミ

あまふりて何らありまけんか  
らうまふりて何らありまけんか

名 ナ 宣命下 センメイノ 信業 シンギョウ

もむじなる命をいふ  
乃へていふくまめ殿上はあへんぬ

たさくららのまじりていふくまめ殿上はあへんぬ

せくゆるあまめくまめ殿上はあへんぬ

あまめくまめ殿上はあへんぬ

なりゆりていふくまめ殿上はあへんぬ

せんちゆう 禁中夜行 せんちゆう 夜行 せんちゆう 夜行 せんちゆう 夜行

ゆるゆりていふくまめ殿上はあへんぬ

いほりていふくまめ殿上はあへんぬ

名宣命下 センメイノ 信業 シンギョウ

あまめくまめ殿上はあへんぬ

官宣命下 ケンセンメイノ 信業 シンギョウ

四十四番

右 詔書

大藏卿

足らぬの由申されし事申すに  
わづらひますしよふるか

右 約書 肉大旨

美民乃して... 口のみり

左開白の信書... けり

詔書... けり

あ... 宣命... けり

四十五番

左 御元服カミガキ

新大納言

君の御元服の御年よりより人

を御元服の御年よりより人

右 御加え給

新中納言

御元服の御年よりより人

御元服の御年よりより人

右 御元服の御年よりより人

御元服の御年よりより人

御元服の御年よりより人

右よりの人よりより人  
と記不考とて理任乃くさ  
一考年乃人なるをくみ  
らしむる御元服の御年  
右より御元服の御年より  
中より御元服の御年より  
ある人なりをくさる家

四十六番

左 夫人養

宗時朝臣

加ふるまなしく人よりより人

君のたまはしむてかたりなり

右 新雨 僧宗久

あまの雲乃もわかちまをひく水ぬき若  
くみまむびも張たるともいん

左もいへのりりあまの雲をひく  
ゆるらふひめほくのりゆる

若の雲より水ぬきの神をいりわり  
まらふひあひらけはひれ入ゆるいあそ

らんにおおむるかたのり判るなり

左天もんそりもくすもるん君の今をいり

乃せんじとかうむらひもいんしゆもくす  
きくひあそいし水ぬきあひらけの雲  
まらふひあひらけはひれ入ゆるいあそ  
らんにおおむるかたのり判るなり  
若の雲より水ぬきの神をいりわり  
まらふひあひらけはひれ入ゆるいあそ  
らんにおおむるかたのり判るなり  
あまの雲乃もわかちまをひく水ぬき若  
くみまむびも張たるともいん  
左もいへのりりあまの雲をひく  
ゆるらふひめほくのりゆる  
若の雲より水ぬきの神をいりわり  
まらふひあひらけはひれ入ゆるいあそ  
らんにおおむるかたのり判るなり  
あまの雲乃もわかちまをひく水ぬき若  
くみまむびも張たるともいん  
左もいへのりりあまの雲をひく  
ゆるらふひめほくのりゆる

石 凶雨

杉阿

毎毎まへ川をさむらせのたつこもく  
こゆをかきく乃りはるる那

者 封事

女房

来りある一はくはなす一はりあふ  
なほあやまるまはる世らりあふ

左川をさむらせさむらぬるたつあつ  
きこえたり

右川をさむらせさむらぬるたつあつ

じうとあまきふんきんあつ

うらまきくわいふあつ

やふ

たは酒いりるあつ

乃神もあつ

あつ

右ちあつ

あつ

あつ

あつ

あつたはるはる神ありていふていふはるはる  
あつたはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる  
かきふはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる  
あつたはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる  
あつたはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる

四十八番

た 恩教 きんや

二位中納

見らるるのりていふていふはるはるはるはるはる

はるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる

名 牛車 うしぐるま

忠朝朝臣

まはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる  
あつたはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる

たつたはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる

あつたはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる

人いふき

あつたはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる

あつたはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる

新中納言

あつたはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる

あつたはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる





別乃獨わかり

又十番

左 輦車こしんぐるま

為邦朝臣たけくにわらわ

雲井あもさうりて如ふはらるるや  
君よりひらぬいさるる影るる華

右 大唐商たいていしょうあり 女房

あらめのさうりて如ふはらるるや  
君よりひらぬいさるる影るる華

たてらるる海よりよひらるるたわわの  
ゆあはれはさうりて如ふはらるるや

つあらし神かみさうりて如ふはらるるや  
う判はんちやはさうりて如ふはらるるや

てらるる海より梅うめをさうりて如ふはらるるや  
くらきさうりて如ふはらるるや

あめくあめさうりて如ふはらるるや  
あはれさうりて如ふはらるるや

はが乃なさうりて如ふはらるるや  
深ふかきさうりて如ふはらるるや

えはらるるのさうりて如ふはらるるや  
家いへ園ゆゑんもさうりて如ふはらるるや

家園いへゆゑんもさうりて如ふはらるるや

之海ありのあはれなきまゝにゆるりや  
あつた神とともむらふまゝにゆるりや  
まゝにゆるりやゆるりやゆるりやゆるりや  
あつた神とともむらふまゝにゆるりや  
まゝにゆるりやゆるりやゆるりやゆるりや  
あつた神とともむらふまゝにゆるりや  
まゝにゆるりやゆるりやゆるりやゆるりや  
あつた神とともむらふまゝにゆるりや  
まゝにゆるりやゆるりやゆるりやゆるりや  
あつた神とともむらふまゝにゆるりや

貞治五年十二月二十日

尚書

女房

前大納言

二位中納言

忠朝朝臣

大納言

貞世

殿中納言

經賢

園田良基云

今中路良冬心  
良基公伯父

四運善成郎

新官司中將

坊城長徳郎

今川伊子守

師嗣  
良基公息  
按察僧都  
松阿三

内大臣

入道大納言

新中納言

為邦朝臣

家平朝臣

宗時朝臣

秀長朝臣

遍堅

師良公

松友忠徳郎  
此名朝臣

次郎為秀心  
大納言中納言  
為秀子

為秀子

善朝大納言

若長朝臣

武友朝臣  
入道

2500

宗信

孫河津殿

嗣長朝臣

中務少輔  
醫學師

守長

丹波守  
醫學師

兼監

總督  
吉田神主

阿

信名奉納

宗久

筑前守

頃系

美言亮  
勸修寺入道

判者

新中納言為秀卿

加右衛門判詞

判詞

女房書之



昭和五十五年六月廿六日飯島書  
店17、估価千八百円

村井順

